『女の一生』はなぜ『人形の家』に勝てたのか

藤井淑禎

本屋の店頭にむらがる人々、などといったようなキャプションのついた写真を、日本史の教科書や関連本でよく見かける。第二次大戦後、知的なものに餓えていた人々が、戦時中は思想統制と出版統制のせいで思うように読めなかった本や雑誌にとびつき、むさぼるように読んだというのである。

「世相から見た戦後十二年」を振り返って「日本はこんなに変った」という特集を組んだ『サンデー毎日』特別号（一九五八年二月）は、「出せば売れた新刊書」という見出しのもとに、こんなふうに当時の様子を紹介している。

敗戦とともに、文化に対する欲求を復活した国民はたちまち本にとびついた。インフレのせいもあったが、古本は定価の百倍以上にもはね上がるさわぎだった。岩波書店が新刊書を売り出すときには、前夜から行列を作るありさまだった。一人一冊といった制限も作られた。

戦後、出版の自由が認められると同時に雑誌の創刊が相次ぎ、出版社も三〇〇社が一気に一〇倍くらいに激増した。紙不足は深刻だったが、作るほうも読むほうも、たとえ粗悪なザラ紙であっても何ら気にすることなく、そうした逆境をはねのけていった。

空前と言っていい戦後の出版ブーム、読書ブームなわけだが、ここで、見逃してはいけないことが二つある。

一つは、その動機が単なる「文化に対する欲求」、すな

わち知的欲求や新しいものへの関心などからだけではなかった、という点である。この点についてボクは、高度成長期の巨大な読書ブームの土壌となった諸条件—図書館運動、読書サークル、貸本屋、そして全集ブームに文芸映画ブーム—を発掘紹介した『高度成長期に愛された本たち』（二〇〇九年）という本の最終章で、ほんの少しだけ触れている。

戦後日本の再出発が、戦前戦中への根底的な反省のもとに進められたことは当然だろう。なにしろ結果から見ても、国は焦土と化し、多くの国民が戦死し傷つき、何よりも、アジアの国々や人々に与えた迷惑は大変なものだったのだから。

いったい、なぜそのようなことになってしまったのか。何が悪くて、どこに問題があったのか。それらを究明・自覚し、それらを改めることから、再出発は図られなくてはならない。そうした時、まず第一に槍玉に挙げられたのは当然のことながら軍国主義だった。付随して、それを推進した男性中心社会、とりわけ封建的家父長制度。さらにはそれらを下支えした言論・思想統制を始めとするさまざまな統制や弾圧、ひと言で言えば、自由の抑圧だ。

したがってそれらへの反省に基づく再出発は、単純には、その逆を目指せばいいということになる。軍国主義に対しては平和主義、男性中心社会に対しては、それまでの「婦女子」的偏見の撤廃、すなわち女性の地位向上や子供の尊重。何よりも、女性や子供は戦争に実質的に加担しておらず、手を汚していなかったという意味でも、戦後の重要な担い手として期待された。そうした男女や年齢による差別だけでなく、職業・階層などさまざまな不平等の撤廃も意識された。

自由の抑圧からの解放も、戦後の大目標だった。恋愛・結婚から、思想や表現まで、その範囲は広大だ。逆に言えば、戦前戦中は広大な範囲の自由が抑圧されていたことになる。そのなかでは、カストリ雑誌やストリップ・性典映画などに代表される性風俗の解放・自由は一種の継子のようなものだが、何といっても、自由、と言った時にその象徴たりうるのは、やはり恋愛の自由だろう。これもまた戦後の大目標の一つだったのである。そうして以上のすべてをくくるのが民主主義という理念であった、と概括してみてもいい。

こうした多くの目標を掲げた戦後日本の再出発であったわけだが、課題山積のなかにあって、人々が書物、とりわけとっつきやすい文学作品のなかからそれらの難題に立ち

向かうためのヒントや知恵や処方箋、さらには励ましや勇気をもらおうとしたのは自然なことだ。戦後の出版ブーム、読書ブームの動機・背景は単なる「文化に対する欲求」などというのんきなものではなく、もっと切実なものであり、戦後日本が、あるいは日本人が、生き残れるかどうか、ちゃんとした方向に生まれ変わることができるかどうか、といった切実な願いに支えられたものだったのである。

戦後の出版ブーム、読書ブームに関して見逃してはいけないことの二つ目は、このブームは戦後の一時期で終わったのではなく、実際は二〇年以上にも及んだということである。のちの高度成長期の巨大な読書ブームにそれは接続している。

本来の高度成長期の範囲については、昭和三〇年代の初めから、すなわちいわゆる「もはや『戦後』ではない」（一九五六年度『経済白書』）前後からと見るか、これまた有名な所得倍増計画（六〇年）前後からと見るか、二説あるが、出版・読書現象に注目して高度成長期の巨大な読書ブームという時には、一九五〇年から七〇年頃までの二〇年間、としておきたい。理由は、図書館活動が整備され読書サークルが誕生し始めるのが五〇年前後からであり、文庫本ブーム・初期全集ブームがそれに続き、要するに、本来の高度成長期の出版・読書状況と変わらない状況が、この頃から始まっているからである。

大雑把に言って、終戦からの五～一〇年間が敗戦からの復興・再生という目標を掲げた時期だったとすれば、その後の一五～二〇年間は、今度は欧米に追い付き追い越せという、さらなる大目標を掲げた成長と発展の時期、ということになる。そしてこの二つがつながるのは、すでに見た自由、平等に代表される民主的理念がその間ずっと有効で、かつ重要な目標であり続けたからであり、また、それらを獲得・実現するために人々が文学のなかにヒントや知恵、励ましを見出そうとした点も、共通しているからにほかならない。

さて、それでは戦後の読書ブームから高度成長期の読書ブームにかけての時期に、実際に人々がそこから知恵や勇気をもらおうとした本とはどんな本だったのか。本論では、戦後日本が目指したいくつかの目標のうちでも、これからの女性はどうあるべきかという目標に絞っていくつかの作品を取り上げ、それらと読者、社会とがどのような相互関係にあったかを見ていくことにしよう。

＊

これからの女性はどうあるべきか、は、軍国主義の克服

と並んで、戦後の日本人が直面させられた大問題だった。そのヒントを得るために、当事者である女性たちを中心に大挙して書物に向かったというわけだが、なかでもさまざまな名作の中のヒロインたちの生き方は、戦前の男性中心主義や封建的家父長制度、さらには恋愛や結婚への過干渉を乗り越えようとしてあるべき姿を探しあぐねていた戦後日本の女性たちにとって、かっこうの参考材料であり、時にはお手本となった。

そんななかにあって、モーパッサンの『女の一生』は彼女たちの圧倒的な支持を得た作品の代表的なものの一つだった。戦後最大の国民文学としての『風と共に去りぬ』にはわずかに及ばないものの、『風と共に去りぬ』が横綱級の作品であるとすれば、優に大関、それも東の正大関級の作品だったのである。

『女の一生』のヒロインは、ル・ペルチュイ・デ・ヴォー男爵の娘ジャンヌである。彼女は一二歳から一七歳まで修道院で教育を受けたが、その彼女がようやく「自由の身となって」（小佐井伸二訳）修道院を出て、両親らとともにノルマンディー地方のレ・プープルにある彼女に与えられた館に向かうところから作品は始まる。一八一九年五月という設定であり、物語はそこから三〇年近く経って、暮らしに行き詰まり館を追われて小さな家に移り住んだジャンヌのもとに、放蕩息子のポールの恋人が産んだ赤ん坊を、少女時代からジャンヌを支え続けた乳姉妹のロザリがパリから連れ帰るところで閉じられる。

その間に、恋愛、結婚、夫の裏切りと死、さらには息子までが身を持ち崩し、ついには経済的にも行き詰るという、まさに波乱の女の一生ならぬ半生が、辿られるのである。こうした『女の一生』について、あるいはジャンヌについて語られる時、必ずと言っていいほど、他の名作の中のヒロインたちが引き合いに出される。『ボヴァリー夫人』のエンマであり、『アンナ・カレーニナ』のアンナであり、さらには『人形の家』のノラ、『復活』のカチューシャ、『魅せられたる魂』のアンネットらである。

たとえば瀬戸内晴美は、『女の一生』を『復活』、『ボヴァリー夫人』、『アンナ・カレーニナ』と比べて、ヒロイン論をこころみている（「世界の文学24」月報、六三年）。読書遍歴としては『復活』と『ボヴァリー夫人』が先で、ついで『女の一生』を読み、「『女の一生』が、一番面白く、一気に読めた」と回想している。ところが少し大人になって読み直したところむしろ「一番類型的」でつまらなく感じ、さらに何年かしてさまざまな人生経験を積んだあとまた読

み直してみると、今度は「『女の一生』が、実に深い人生の真理と真実を描いているのに、今更のように驚かされた」と言っている。

カチューシャのような境遇に生まれ、雇主の甥とのあやまちで、つまづく女は、今でも世の中にはたくさんいる。エンマのように、夫以外の男との情事で破滅する女もたくさんいる。けれども、『女の一生』のジャンヌのように、自分は何もしないのに、一生への夢が片はしから打ちくだかれ、人生に裏切られつづけて生きる女は、最も多く、女のほとんどの運命をそれは代表しているといえる。

この『ボヴァリー夫人』のエンマの同類が『アンナ・カレーニナ』のアンナであり、要するに彼女らは、「共に女の不幸を代表しているけれど、彼女たちはそれぞれ、自分で選んだ行為の結果としての不幸」であり、それに対してジャンヌの場合は、「どれもみな、他動的に襲いかかってきた、天災のような不幸で、防ぎようのないものだった」と見るのである。「そして、今でも、何と多くの人妻が、女が、このジャンヌのような、他動的な暴力的な不幸が襲いかかるのに、泣きながら堪えていることだろう」。

次は、ジャンヌとエンマ、アンナとエンマ、を比較している堀秀彦の意見に耳を傾けることにしよう。堀は「ジャンヌとエマ―二人の女」（新潮社版「世界文学全集18」月報、六一年）というタイトルのもとに、二人を比較し、前者を「母としての女」、後者を「恋人としての女」として、二人の悲しみや悲劇は、「それぞれ女としての半分、あるいは半面だけにしか生きることができなかったところから来ている」と言っている。「母親としての女の悲しみ」が描かれているのが『女の一生』で、「愛に生きる女の悲しみ」を描いたのが『ボヴァリー夫人』だというのである。

しかし、そうは言いつつも、堀は最後に『ボヴァリー夫人』を「一番何度もくり返してよまずにすまされなかった小説の一つ」と持ち上げており、こうした堀の『ボヴァリー夫人』観は、「飢え乾いた女の一生」（新潮社版「新版世界文学全集58」月報、五八年）と題された文章にも見られる。「女の一生」という言葉を使いながらもこれは『ボヴァリー夫人』のみについての意見であり、こんなところにも堀の『ボヴァリー夫人』への偏愛ぶりがうかがわれる。

この文章のポイントは二つある。一つは、『ボヴァリー夫人』が「完全な小説」であり「リアリズム文学の頂点」

だということ。二つ目は、それゆえに読者は、「人間というものをはっきり知る」ことができ、「女というものを彼女の「たましい」の底の底から理解」できるということ。「人間と人生をかぎりない誠実さを以て見詰め、描くこと」で、エンマとシャルルという「あわれな一粒の男と、女」を描きえたのだと言っている。「愛し、求め、しかも限りなくいつまでも飢え乾いた彼女の一生」とも言っており、ジャンヌと比べての能動性、愚かとさえ言ってもよいような能動性にこそ堀が惹かれていたことがわかる。

恋愛論エッセイを書く時よく『アンナ・カレーニナ』と『ボヴァリー夫人』を読み直す、という言葉で始められた「『アンナ・カレーニナ』のこと」（河出「世界文学大系47」、八〇年）では、堀はどう言っていただろうか。

実はここではエンマはほとんど問題にされていない。もっぱらアンナの「たどらねばならなかった悲しい人生行路」に注目し、他方では道ならぬ恋の成就後の男女の思いのズレに目を凝らして、そこに「人間の哀しさ」を読み取っている。恋の成就後の男女のズレや落差は、当時一世を風靡した堀恋愛論のもっとも得意とするところだが、いずれにしても能動性への高い評価は一貫しており、むしろその点において『アンナ・カレーニナ』のほうがまさっていると見ているのである。

エンマとアンナを比較したという点では桑原武夫の解説（「カラー版世界文学全集21」、六七年）も同様だが、桑原もはっきり『アンナ・カレーニナ』のほうに軍配をあげている。「ひとしく姦通を取扱った名作『ボヴァリー夫人』と読みくらべてみるがよい。『アンナ・カレーニナ』の優位性はただちにはっきりするであろう」としたうえで、桑原はこのように指摘している。

> 人生に理想はもちえぬものとあきらめた不幸な人間の文学は、人生に理想はなければならぬと信じ、これを追求しつつ悩みぬいた人間の文学の前に、その美しさが色あせて見えるのである。フローベールは描写の美に究極目標を見ることによって、その描写に表面性しかあたえぬにいたったが、トルストイは、思想こそ究極目標と考えつつ、しかも、その思想なるものは文学者であるかぎり描写によってしか伝えぬとすることによって、その描写に厚みと的確性をあたえるのである。

すぐわかるように、これは作中人物論ではなくて作家比

較論だが、とりようによっては、『アンナ・カレーニナ』のほうには作中人物に作者の思想の裏打ちが見られるともとれ、堀の能動性評価とつながる見解と言えるかもしれない。

「超悲劇『女の一生』」とは、中村光夫のモーパッサン集の解説（デュエット版「世界文学全集39」、六八年）中の小見出しの一つだが、ここでも堀論と同様、『女の一生』のほうが『ボヴァリー夫人』よりも、下位に位置づけられている。

ところが『女の一生』はある人間の悲劇というよりも、「ボンテ」（人の好さや甘っちょろさを意味するとされる—藤井注）という人間の一性質が演ずる悲劇という印象を読者に与えます。エンマがとにかくある生活を築き、生きる意味の過剰から、死を選んだのに対して、ジャンヌははじめから生きる能力を持たず、人生からなにひとつ自分のものを得られないところに、彼女の悲劇があるといえばあるのです。彼女と人生とのあいだには、劇を生むにたる交渉さえないのです。

だから『ボヴァリー夫人』が悲劇ならば、『女の一生』は超悲劇で、ある人間を描いたというよりも、人間性の一面について、作者が残酷な実験をこころみているといってもよいのです。

こうした、能動性を評価して『ボヴァリー夫人』のほうを高く位置づける論調をインテリ型評価とすれば、先に見た瀬戸内や次に紹介する青柳瑞穂の解説（講談社版「世界文学全集61」、六八年）などは、一般読者に寄り添った評価と言えるだろう。

もちろん、『女の一生』にも新しいタイプの人間なんてひとりだって出てくるわけではない。しかし、『女の一生』が天下の子女の紅涙をしぼって、ベストセラーのトップになったというのも、登場人物が、新しい型の人物どころか、読者のよく知っている、読者になじみのある人たちばかりだからではなかろうか。

そして、こういう親しみやすい人たちが、先刻も言ったように、じつに周到に、念入りに書き込まれているのである。（中略）思うにこれは外国文学というよりは、すでにもう立派な日本の小説である。日本の古典である。そういえば、登場人物も私たちの周囲にいるような人たちばかりで、おそらくはトルビアック神父

の説くカトリック教をのぞけば、私たちの理解外にあることは何ひとつないと言っていいだろう。そして、私たちは、あのような苦労にもかかわらず、なおかつ、生涯、うぶな心をもちつづけてきたかわいそうなジャンヌを愛せずにはいられないであろう。

一般読者型評価のきわめつけは、「私たちはジャンヌのなかに自分の生き方も映るように、おもうのではなかろうか」（「『女の一生』への思い—新訳『女の一生』に寄せて—」「世界の文学21」月報、六三年）と述べる佐多稲子のエッセイである。

しかし読みすすむジャンヌの生活の、なんとまざまざと身近に感じられたことだろう。『女の一生』という言葉がぴたりと自分の胸に貼りついた。まわりを見まわし、ああ、女の一生！　と、自分のゆくてを見つめるおもいをした。（中略）

過去に、これはまざまざと女の一生であったにちがいない。それは世界中で同感される女の一生であったろう。（中略）モーパッサンの女の生きかたを見つめた目は、人間的な愛に根ざし、しかも鋭い。ジャンヌと、乳姉妹ロザリの晩年の対比的な描きかたなどはモーパッサンの鋭さである。ここに女の生きかたの方向さえしめされているといえよう。

いま新しく、若い方の手になる『女の一生』を読み、また思い深く、女の生きかたを見まわした。

一般読者に寄り添うか、知識人の立場から見るか、で、『女の一生』の評価が食いちがっていたことがわかるが、それ以上に重要なのは、佐多が「女の生きかた」と連呼していたことからもうかがえるように、戦後から高度成長期にかけての女性の半生ものの読書は、これからの女性の生き方はどうあるべきかをめぐって、ヒントやお手本をそこに見出そうという目的のもとで読まれたということだ。その観点から見た時、先に見たヒロイン論の対象となっていた諸作は、どのように位置づけられるだろうか。

＊

これからの女性の生き方は、単純化して言えば、戦前の男性中心主義や封建的家父長制度からの解放、恋愛や結婚の自由の獲得、などが軸となるが、戦後そうした方向性のもとに打ち出された方針や施策を、『女の戦後史Ⅰ』などの助けを借りて最初にまとめておこう。

女性の意識覚醒、地位向上の原点となったのは、言うまでもなく日本国憲法だった。もっともそれ以前に一九四五年一二月には選挙法が改正され、女性が参政権を獲得する、というような変化もすでに見られたけれども。「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない」（憲法第一一条）、「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない」（憲法第一二条）、「すべて国民は、個人として尊重される」（憲法第一三条）、「すべての国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において差別されない」（憲法第一四条）、等々といった大原則をうけて、女性に関わりの深い第二四条［家族生活における個人の尊厳と両性の平等］は、以下のようになっている。

婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家庭に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。

個人の権利、平等、男女同権、などの理念が至るところで繰り返されている。そしてこの憲法に少し遅れて、それらの理念の具体化とも言うべき民法第五編親族、第六編相続の改正がおこなわれた。

そこでは、戸主権を中心とする「家」に関する規定はすべて姿を消し、妻を無能力者と扱う規定も削除された。（中略）

改正民法はこのほか、婚姻に対する親の同意を未成年者に限り、妻の財産に対する夫の管理権も廃止、離婚原因は夫婦平等とし、夫の不貞を特別扱いすることもやめ、離婚後の生活安定を目的とする財産分与の新設、父母平等の親権、そして、家督相続の廃止による諸子均分相続と配偶者相続権の確保など画期的といえるものを多く盛り込んだ。これらの中でも、とくに財産分与請求権と配偶者相続権に対する女たちの期待は大きく、婚姻や離婚の自由、自立を経済的に裏づけるものとして歓迎された。（鍛冶千鶴子「民法改正」、『女の戦後史Ⅰ』）

このほか、男女の平等にかかわるものとしては、「すべて国民は、ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであって、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない」、「男女は、互に敬重し、協力し合わなければならないものであって、教育上男女の共学は、認められなければならない」ことなどをうたった教育基本法（四七年）もあるが、敗戦後数年の間に矢継ぎ早に実現された女性の意識改革、地位向上のための施策は、その具体化と肉付けを、すなわち、では具体的にこれからの女性はどうあるべきかへの答えを要求しており、そうした必要上からも、手っ取り早い方法として、名作の中にヒントやお手本が探られたのだった。

＊

そんなふうに考えてくると、その能動性に対していくら知識人層の支持があったとしても、正式な婚姻関係に刃を向ける『ボヴァリー夫人』や『アンナ・カレーニナ』にお手本になる資格はありそうもない。『復活』にしても、再生をとげる後半はともかくとして、前半は何しろ「雇主の甥とのあやまちで、つまづく女」（瀬戸内晴美）の物語なので、同様である。

そうなると、憲法にいう「基本的人権」、「個人として尊重」、「法の下に平等」を実践しているのは、「ほんとうに一人立ち」し、「一個の人間」として生きたいと願う『人形の家』のノラであり、「自分の魂」という一番本質的なもののために義務として「自分を十分に保って」おこうとする『魅せられたる魂』のアンネット、ということになるだろう。ところが、にもかかわらずこの両作品は、『女の一生』ほどには読者の支持は集めなかった。『女の一生』を東の正大関とすれば、十両か、せいぜい幕内の前頭の下の方、といったところだったのである。理由は簡単だ。立派な施策こそ整備されたものの、まだ、日本の社会も女性たちの意識も、そこまで達していなかったのである。

『魅せられたる魂』の支持者といえばたとえば宮本百合子のような進歩的女性に限られていたのだった（宮本百合子『文学にみる婦人像』七三年、ただしアンネット論は戦前のもの）。五三年にこの作品を映画化するにあたって脚色を任された田中澄江は、のちに当時を回想して「わたくしはアンネットの強烈な生き方を、日本の風土に移し植えるなどという願望が、本質的に無理至難な業なのであろうと思った」（「世界の文学29」月報、六三年）と述べており、むしろこちらのほうが平均的な受け止め方だったのではな

いだろうか。

『人形の家』のノラに関しては、こんなエピソードがある。『女の一生』と『人形の家』が読書サークルや婦人読書会で取り上げられる双璧であることは前述したが、大学講師の男性が指導するある婦人読書会の様子を描いた深田久彌の「婦人読書会」（『新潮』五五・四）という小説では、『人形の家』をテキストに取り上げたところ、「ノラの主張は正しいと思ひますが、家出までする必要はなかつたんぢやないでせうか。もう少し慎重であつてほしかつたと考へます」だとか、「あんな風に家庭を放棄しては、あとできつとノラは後悔するにきまつてゐますわ」、「ノラさん、なぜあんなに腹を立てるんでせう。あの御亭主さんはうちの宿六なんぞに比べると、数等物分りのいい立派なお人ぢやないかね」などといった否定論が噴出して、大学講師がやっきになって、ノラの「人間としての眼ざめ」の尊さ、家出の意義、「ノラの永遠の価値」を説く場面が描かれている。

ところがこれには強烈なオチがあって、講師の説を真に受けた女性が家出をすると言って来て、彼が「タジタジとなつて」当惑する場面が添えられているのである。そしてそれを見た女性の言葉がふるっている。—「先生のお口からそんな言葉を聞かうとは思ひませんでした。よろしうございます。私はこれから私自身を教育いたします（ノラの言葉そのまま—藤井注）。（中略）婦人読書会の先生のお教へは、ただのそそのかしに過ぎなかつたのでせうか。（中略）先生は言葉だけのかただつたのです」。

日本の社会も女性たちの意識も、まだまだ施策の理念にはほど遠く、そのあたりのことをタカクラ・テルは「男女わ同等になつたかというと、けつしてそーではわない。（中略）ニッポンの女わ、今も、やはり、家庭にしばりつけられ、どれいの要素おもつている」（『ニッポンの女』五一年）と書きつけ、阿部知二は「戦争の後、憲法が新になり、女性の人権は高くみとめられ、古い家族制度の絆は弱まつたといわれるが、それはまだ十分ではない」（『夜明けに進む女性』五六年）と記さざるを得なかった。『婦人公論』が「日本の「家」はまだ暗い」という特集を組んだのは、阿部の本の刊行年と同じ五六年七月のことだったのである。

＊

これらとは逆に、『女の一生』への高い支持は、まずは第一に、当時の日本社会と女性たちの意識の現実と、かけ離れていなかった点にその理由が求められなくてはならない。前述の青柳瑞穂の解説や佐多稲子のエッセイにあった

ように、「登場人物が、新しい型の人物どころか、読者のよく知っている、読者になじみのある人たちばかりだから」、「トルビアック神父の説くカトリック教をのぞけば、私たちの理解外にあることは何ひとつない」（青柳瑞穂）、「ジャンヌの生活の、なんとまざまざと身近に感じられたことだろう」（佐多稲子）、といったように。

もっとも、だからといって、当時の日本の読者は決して古風な女の物語を読もうとしたのではあるまい。「日本でも憲法の改正後、男女同権が叫ばれ妻の地位が高められた」（中川一政・暢子「夫婦生活の妙諦を語る」『婦人画報』四七・七）のを受けて、やはり、これからの女性の生き方を探るためのヒントや手本を得ようとして『女の一生』に向かったのだ。

その意味においても、この作品の原題が「ひとつの生涯」であったのを『女の一生』としたのは、大きな意義があった。これからの女性の生き方はどうあるべきかをめぐって、ヒントやお手本を名作の中に見出そうとした時、このタイトルはいかにもぴったりの処方箋を与えてくれるかのような期待を抱かせるものだったからである。もっとも、それが実際に読んでみると「過去に、これはまざまざと女の一生であったにちがいない」（佐多稲子）と言われるような古風な女の物語であったからといって、読者が期待を裏切られたと短絡的に決めつけることはできない。一種の反面教師として、『女の一生』は、これからの女性の生き方はどうあるべきかについて、十分さまざまなヒントを与えてくれていたからである。身近に感じられる点と、反面教師としてこれからの女性の生き方を示してくれている点と、これが『女の一生』が、『アンナ・カレーニナ』や『ボヴァリー夫人』はもちろんのこと、『人形の家』や『魅せられたる魂』にも勝つことができた理由であったにちがいない。

ところで、『女の一生』が『人形の家』らに勝てた理由は、それだけではない。いっけん地味なタイトルであるにもかかわらず、実におもしろいのである。そのおもしろさは、「永遠の乙女ジャンヌの魂を通して女の幸福を非情に追求した」（「世界の文学」の帯より）だとか、「清純なジャンヌの夢は早くも初夜に敗れ、重なる背信に傷ついていく」（同、月報上の予告文より）などといった宣伝文句上の面白さとは、はっきりいって比べものにならない。以下そのおもしろさを紹介して、『女の一生』が『人形の家』らに勝てた理由を念押ししておこう。

前述のように、『女の一生』は主人公のジャンヌが自由の身となって修道院を出るところから始まる。「ついに永

久に自由の身となって、久しく夢みていた人生のあらゆる幸福を今こそつかまえようと」するところから。その意味で『女の一生』という小説は、自由と解放から始まる物語といってもよい。戦後日本の、さらにいえば戦後の日本女性の再出発を重ね合わせることもできるような出だしだ。

目指すのは、レ・プープルにある彼女に与えられた古い館であり、「彼女は海辺のあの自由な生活に無限の喜びを期待していた」。ほとんど寓意といってもいいくらい、女性読者はそこに戦後の解放感を感じ取っていたはずである。ついで物語は豊饒な自然描写の世界へと移行し、そのなかで、自然に抱かれるジャンヌ、恋を夢見始めるジャンヌの思いへと展開していく。「若い娘ははじめ、大気を吸う幸福に身をまかせていた。すると田園の安らかさが、さわやかな水浴のように彼女の心をしずめてくれた」。「彼女は恋を夢みはじめた。恋！　二年このかたそれが近づいてくるという、いや増す不安で彼女の心は満たされていた。いまや彼女は自由に恋をすることができる。ただ出会いさえすればいいのだ、彼に！」

こうして物語はジュリアンとの出会いと結婚、コルシカ島への新婚旅行、と、いただきへとのぼりつめていく。しかし、女としての幸せという意味ではジャンヌにとってこのコルシカ島への旅は文字通りのいただきであって、そのことを帰国後ジャンヌはいやというほど思い知らされることになる。「そのとき彼女は気づいた、自分にはもうすることが何もなかった、永久にすることが何もないのだ」。「蜜月の甘い現実が、日常的な現実に変わろうとしていた」。こうした茫然自失がジュリアンの態度に起因するものかどうかははっきりとは書かれていない。しかし、いずれにしてもジュリアンの変化もこれに対応するものだったのである。

> 彼女とジュリアンとの関係は完全に変わっていた。新婚旅行から戻って以来、自分の役を終えて素顔にかえった役者のように、彼はまったく別人のように見えた。彼が彼女をかまうことはほとんどなかった。彼女に話しかけることさえめったになかった。恋の痕跡は突然にことごとく消えてしまった。彼が彼女の部屋に入ってくる夜はまれになった。

以後、ふたりの関係はいっときの例外を除いては基本的に変ることはなかった。そうこうしているうちに、この小説の読者が腰を抜かすような出来事が発覚する。小間使い

のロザリの妊娠・出産であり、その後夫とロザリが同衾しているところを目撃して、ジャンヌはすべてを知り、「おお、自分の一生はうちくだかれた」と断崖から身を投げようとまでする。しかもロザリと夫との関係は最初からであり、新婚旅行から帰った夜も求められたと聞いて、ジャンヌは「かぎりない絶望が心にしみとおるのを感じていた」。

皮肉な運命はその後もジャンヌを襲った。ジャンヌにもジュリアンとの子ができ、夫に愛想尽かししたジャンヌは「突如として熱狂的な母親になった」。いっぽう夫の放蕩はやまず、今度はフールヴィル伯爵の夫人ジルベルトがその相手だった。しかし、二人の関係はやがて伯爵の知るところとなり、伯爵の復讐によって二人は無惨な横死をとげる。ジャンヌの体には策を弄して授かったもう一つの命が宿っていたが、このショックで死産、こうしてジャンヌのもとにはポールと名付けられた愛児と、夫との甘美な思い出だけが残されたのである。

以後小説は育児編、母親編に転じ、これまた有名なポールの乱行—賭博、女性問題、事業の失敗、借金—がジャンヌを苦しめる。しかし救いとなるような話題もあった。家を追われたロザリが二四年ぶりで現れ（息子も成長し、最近結婚もしたという）、以後ジャンヌを前にも増して支え続けることになったからである。そうして最後は、ポールの放蕩のために暮らしに行き詰まり館を追われて小さな家に移り住んだジャンヌのもとに、ポールの妻が産んだ赤ん坊をロザリがパリから連れ帰り、ポールの帰郷も予告されたところで閉じられる。ロザリのつぶやく、あの有名な「人の一生というものは、人が思っているほどよくもなく悪くもないものですね」という言葉と共に。

この小説を「母としての女」しか描かれていない、母という半面だけしか生きられなかったがゆえの悲しみ、とこきおろしたのは前述のように堀秀彦だが、こんな風にまとめてみると、およそ見当違いな評であったことがわかる。単純にページ数だけで言っても、「世界の文学24」で全二一三ページ中、ジュリアンの死後の部分に割かれたのは五〇ページ余りに過ぎない。その意味でも、この小説の中心となっているのはジャンヌとジュリアンとを描いた部分であり、しかもジュリアンはジャンヌの抱える問題を引き出す係に過ぎないから、中心は女として妻として（母としてではなく）のジャンヌ、ということになる。

そして女として妻としてのジャンヌを翻弄し続けたのは、性の問題であると言ってよいのではないだろうか。前半の性の目覚めの部分、中盤の夫との性の関係に悩む部分、こ

れはまさに堂々たる、女の一生ならぬ、女のヰタ・セクスアリスなのである。

その意味で前半のヤマ場は、何といっても、コルシカ島の新婚旅行でいただきへとのぼりつめていくジャンヌの性の開花の部分だろう。前述の帯に「清純なジャンヌの夢は早くも初夜に敗れ」云々とあったことは紹介したが、これまたとんでもない見当違いで、これは単に初めての行為に、苦痛に、ジャンヌがショックを受けたに過ぎない。初夜の部分は六ページにもわたって細叙されており、これはこれで立派なヰタ・セクスアリスだが、いずれにしても「ジャンヌの夢は早くも初夜に敗れ」てなどいない。

その証拠に、その後のジャンヌの官能のめざめは徹底して描かれているからである。いただきのなかでもさらなるピークは、コルシカ島の渓谷の小径をたどる途中、泉の水を飲みながら抱き合い、感極まって結ばれる場面だろう。

こうして彼女が水の冷たさを味わっていると、彼が彼女の胴をかかえて、管の先（ここから泉の水が流れてくる仕掛け—藤井注）を彼女から奪おうとした。彼女は抵抗した。唇と唇とがたたかい、触れ合い、押しのけ合った。（中略）真珠のような小さな水滴が彼らの髪のなかできらきら光った。接吻が水の流れのなかを流れた。

突然、ジャンヌは愛の霊感をおぼえた。彼女はその透明な液体を口いっぱいにふくむと、顔を革袋のようにふくらませて、口移しに彼の渇きをいやしてあげたいということをジュリアンにわからせた。（中略）

ジャンヌはかつてない愛情をこめて彼にもたれかかった。彼女の心臓は激しく鼓動を打った。彼女の胸はもち上がった。（中略）そして自分から彼をひきよせて、あおむけになり、恥ずかしさに真っ赤に染まった顔を両手でかくした。

彼は彼女の上におどりかかった。そして夢中で彼女を抱きしめた。彼女はいらだたしい期待のうちに息をはずませていた。不意に彼女は一声叫びを発した。電撃のように、呼んでいた感覚に打たれたのだ。

その夜、ジャンヌはふたたびこの絶頂感を体験する。「あの泉の苔の上で感じた官能の激しい不思議な興奮」の再来を不安視していたジャンヌだったが、「寝室で二人だけになったとき、彼女は彼の接吻にまた無感覚になっているのではないかとおそれた。が、彼女はすぐに安堵した。

そして、その夜が彼女のはじめての恋の夜となった」。

それから先の旅はもう夢でしかなかった。果てしのない抱擁、愛撫の陶酔でしかなかった。彼女には何も見えなかった。風景も、人々も、足を止めた場所も。彼女はもうジュリアンをしか見ていなかった。

こうして、子供っぽい、すばらしい親密な関係がはじまった。ばかげた恋のたわむれ、おろかしくうれしいちょっとした言葉。彼らの唇が喜ぶからだのあらゆる曲がり角に、周辺に、襞に、甘ったるい名をつけること。

たたみかけられる、このような官能の深まりをみると、前述したような帰国後の冷淡さが信じられないほどだが、ただ、旅の途中においても、自然の美しさに感動して「愛したい欲求におそわれた」ジャンヌに対して、ジュリアンは無理解だった。「彼は女のこうした興奮を、なんでもないことに夢中になる振幅の激しい女のこうした動揺を、理解しなかった。女たちの心を、感動が大異変のように騒がせ、とらえどころのない感覚が動転させて歓喜や絶望で狂わせるということを」。

これに対してジャンヌのほうは、帰国してジュリアンとの関係が索漠としたものになってからでも、さまざまに官能の目覚めを思い出している。両親が若夫婦をレ・プープルの館にのこして自宅のあるルーアンに去ろうとする前日、ジャンヌが父とともにジュリアンとの思い出の森を再訪する場面はこのように描かれている。

二人は森を抜けた。この森を、彼女は結婚の日、生涯の伴侶となった人と身も心も一つにして、歩きまわったのだ。この森で、彼の最初の愛撫を受け、最初の戦慄におののき、のちにオタの荒涼とした谷で、清水に接吻をまぜながら彼と飲んだ泉のほとりで、ついに知るはずになるあの官能的な愛を、予感したのだ。

森での最初の愛撫とは、結婚式の晩餐の前に雑木林を散策して、抱擁や接吻に「陶然とし」、それが「彼女の血管に、また骨の髄に、しみとお」り、「神秘的な衝撃を受けて、夢中でジュリアンを押しのけたが、あやうくあおむけに倒れかけた」ことを指す。これなども、おそらくもはやジュリアンの記憶の中にはないだろう。あの「無理解」の場合と同じように。ただ、これはジャンヌとジュリアンの

個性や人格からくるというよりも、ここで描かれていたのは、愛やその思い出に対する感じ方をめぐる男と女の本質的なちがいのほうだったのではないだろうか。

その意味でこれは、ジャンヌのキタ・セクスアリスであると同時に、性と愛をめぐって男いうもの女というものの差異にも目を向けさせようとする、性と愛の指南書でもあったのである。そしてその指南書という性格は、中盤の夫との性の関係に悩む部分になるといっそう際立ってくる。言うまでもなく、策を弄して二人目の子を授かる部分である。

ロザリ事件以来ジュリアンとは床を別にしていたジャンヌだったが、ある時、二人目の子を、と老司祭に相談して、彼の仲裁で二人の関係(女は妊娠を目的とし、男は性欲の満足のために)が復活する。だが彼の愛撫は以前のようではなく「彼の抱擁はすべて、彼女が受胎しうる前に中断される」のだった。子供はもう沢山、というジュリアンに対して、「ねえ、お願い、私をもう一度母親にして」と懇願するジャンヌ。このセリフは堀秀彦が、『女の一生』というとこのセリフと結末のロザリの言葉とを思い出す、というほどインパクトの強いものだが、ジュリアンは同意せず、ついにジャンヌは彼を「罠」にかけることを決意する。

最初は「有頂天をよそおって」抱擁を長引かせようとしたがそれは失敗に終わり、例の老司祭の入れ知恵で、いつわりの妊娠を告げたのである。最初は半信半疑だったジュリアンだが、ついに観念し、すでに妊娠していると思い込んで「ふたたび妻の寝室へかよいはじめた」。かくしてジャンヌは二人目の子を手に入れることになったのである(前述のように死産)。

いやはやたいへんな小説である。同様の筋書きの韓国の王朝ドラマを見たことがあるが、もちろん『女の一生』のほうが先なのである。いずれにしても、もともとは、これからの日本女性はどうあるべきかを学ぼうとして手に取ったはずの小説が、冒頭こそ『青い山脈』的な解放感あふれる出だしであったのが、中途からはジェットコースタードラマ顔負けの、夫や息子の裏切りに次ぐ裏切りに翻弄されるお話となり、さらには極上の官能小説でもあれば、きわめて実用的な性と愛の指南書でもあったとは。これでは『人形の家』や『魅せられたる魂』がかなわないのは当然だ。名作や純文学を隠れ蓑にした官能小説ほど、手に取りやすく、したがって人気の出るものはないのだから。

それ以上に、ボクが深甚な興味を覚えるのは、堅苦しい婦人読書会の場などで、このあたりがどう受け取られ、どう討論されたのかという点だ。見て見ぬふりをしたのか、

逆に、オルガスムスや産児制限、夫の浮気対策などをめぐって、議論が沸騰したのか。ボク自身は後者の可能性も大いにあるのではないかと思っている。

ボクが愛してやまない舟橋聖一の夏子もの（芸者を落籍されて愛すべき実業家のお妾さんになった夏子の半生記で、長い間『小説新潮』の看板小説だった）のなかに、新聞に載った「キンゼイ報告・女性編」をめぐって、夏子やお手伝いさんが、女性の性的欲求やオルガスムス、婚外交渉、性交時の着衣の有無などをめぐって、激論を交わす場面があるからである（『夏子の四季』五四年）。

これから何年かしてベストセラーとなる謝国権の『性生活の知恵』などの単行本を女性が手に取るのはまだまだ勇気がいったかもしれないが、夏子の場合は新聞である。というか、新聞というような場所にもすでにこうした話題が登場し始めていることのほうが重要で、そうした現象と、『女の一生』のヰタ・セクスアリスぶりや性と愛の指南書ぶりとを地続きのものとして捉えたほうが、実情に即しているように思う。

（立教大学）

投稿規程

一、投稿に資格制限はありません。
二、テーマは大衆文化に関するもの。
三、枚数は四〇〇字詰め原稿用紙換算で、二〇枚程度。
四、採否は編集委員会で決定します。
五、投稿は随時受け付けていますので、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター宛てにお送り下さい。なお原稿はお返ししません。